深い学びのために
学習のポイントの解答例

1　場面展開を区切って、「僕」の行為をまとめてみよう。

【答】　指導資料の「構成」参照。

▼ポイント▲ 自室内でアイロンかけをしていた時に青が消えた。その後、「僕」のとった行為を、⑴自室内で自ら青を確認しようとした。⑵自室内から外部の他者へ連絡をとって青を確認しようとした。⑶自室から外へ出て青を確認しようとし、地下鉄の駅員に問いただした。⑷公衆電話から総理大臣が回答するコンピューター・システムへアクセスし、青の消滅について問いただした。以上の4段階を読み取っていく。

2　「僕」の心情が変化していく過程を考えてみよう。

【答】　指導資料の「構成」参照。

▼ポイント▲ 一九九九年の大晦日の夜に、「僕」はなぜひとりぼっちで自室でアイロンかけをしていなければならなかったのか。青が消える以前からの「僕」の心情は、ガールフレンドと喧嘩別れをしたことから落ち込んでいる状態であった。まず、小説の内容を時系列にそって捉え直してから心情の把握に入っていくとよい。特に、彼女との電話のやりとりの前後は注意深く読んでいく必要がある。落ち込んでいる状態の中で、驚きや不可解さがあり、彼女の受け答えに対しては沈黙したままだが、さらなる落ち込みがあり、あきらめもあるだろう。駅員との会話では、不審を抱き、徐々に不安が大きくなっていく。総理大臣としてのコンピューターの回答によってあきらめの気持ちが強くなるが、最後のつぶやきのところではどのような心情になっているか、考えさせたい。

3　「総理大臣」の言う「それが歴史なのですよ」（二四一・4）、「それが経済なのですよ」（二四一・10）の意味を話し合ってみよう。

【答】　物事が新しくなる裏で多くのものが捨てられ、忘れられていくが、それが人間にどういうものの見方を植えつけるだろうか。進歩発展が歴史であり、経済の原動力というなら、人間はただ前を見て進むだけの動物である。「使い捨ての時代」と言われた高度経済成長期や、バブル経済全盛期の日本社会などの例から考えさせてもよい。人間は、進歩発展だけを優先させて生きてはいけないことに気づかせたい。

ある物が次々となくなっていくことそれ自体が歴史だと言い、次に一つなくなったら、また新しく一つ作ればいいと言う。そのサイクルを消費と生産と捉えれば、それこそが経済だというのである。大量消費、大量生産の時代を極端に語っていることになろう。

4　「僕」にとって「青」とはどういうものだったのか、「でも青がないんだ、と僕は小さな声で言った。そしてそれは

僕が好きな色だったのだ。」（二四一・15）とある太字体の箇所を参考にして、考えてみよう。

【答】　「僕」が自室で青を確認する際に、気に入っていた衣服類の青を「昔から好きだった」と言っているが、次に青として頭に浮かんだのは、ガールフレンドとのハワイ旅行の写真だった。そして、第一段から第二段にかけて、喧嘩別れしたガールフレンドが登場する。ここでは、「僕」にとって、青と彼女とは互いを連想させる関係にあり、ガールフレンドへの気持ちが青として象徴されているようにも思われる。しかし、彼女の冷たい対応からしかたなく外へ青を探しに行ってからは、もう青と彼女との関連は切れていると思われる。総理大臣としてのコンピューターの回答を聞き、遂に新世紀に入ったところでは、「僕」が「僕」自身でいるために必要なものとして、青はさらに象徴化されている。すなわち、青は、生産され消費されてゆく諸々の事物や流行などとは同列に扱えない、「僕」にしか分からない大切なものの象徴であると考えられる。

言葉と表現の解答例

1　「青が消えた」（二三四・1）ことを、「ちょうど機械の…という風に」（二三四・2～6）のように、三通りの比喩で表現してみよう。

【答】　冒頭には、「だんだんかすんで薄くなっていって、それからすっかり消えてしまった」とある。小説の描写に即すならば、このイメージに合うような比喩表現を、色彩以外を例にして考えるのが好ましい。

例1：公園の砂場に作った池の水が、やがて染み込んで乾いていくみたいに。

例2：夏の夜、急に停電でクーラーが止まってしまった後に思い出す涼しさのように。

例3：まるで、九月の台風の後に気付けば聞こえなくなった蟬の鳴き声みたいに。

2　「水をさす」（二三八・6）のように「水」を用いた慣用的用法を集めてみよう。

【答】

- 「水をあける」…競っている者の間に差ができる（差がつく）こと。
- 「水を打ったよう」…静まりかえっている様子。
- 「水を得た魚のよう」…それまで元気のなかったものが、生き生きとしているさま。
- 「水を掛ける（＝水をさす）」…物事がうまく運んでいるのを邪魔して、勢いをそぐこと。
- 「水を向ける」…相手の関心をある方向へ向けるように誘いかけること。

3　「攻防戦」（二三八・16）のように、「…戦」となる三字熟

語・二字熟語を集めてみよう。

【答】
（三字熟語の例）接近戦・宣伝戦・山岳戦・選挙戦・空中戦・地上戦・戦車戦・心理戦・投手戦・乱打戦など。
（二字熟語の例）熱戦・力戦・苦戦・混戦・善戦・奮戦・応戦・開戦・会戦・合戦・交戦・激戦など。

言語活動の解答例

１　この小説の設定が１９９９年の大晦日であることには、どのような意味があるか、考えてみよう。

【答】　ノストラダムスの大予言や、二〇〇〇年問題など、同時代の明るいだけではないパニックを予兆するような雰囲気を調べたうえで考えてもらいたい。執筆時はバブル経済が崩壊しつつある時期であり、平成七（一九九五）年には阪神淡路大震災や地下鉄サリン事件が起こることになる。しかし多くの人々は、日本の経済的成長がまだ続くと信じていた時代だったのかもしれない。

毎年やってくる大晦日でも、翌日からの正月や新年を迎えることにほとんどの人は夢中になる。まして、「１９９９年の大晦日」ということなら、一〇〇〇年に一回のこのときを経験するのは歴史的なことであり、それだけで大きなイベントと言える。つまり、人々が皆いっせいに未来に目を向けるときであり、場面をこうしたときに設定することによって、ひとりで自室にこもっている「僕」の孤立感と特殊なものの見方が自然に強調される。「僕」ひとりだけが何か大事なことに気づき、取り残されていて、そうした孤立感を際立たせるという意味で効果的である。

２　この小説における「青」と「ミレニアム」の関係を、ほかの例に置き換えて、考えてみよう。

【答】　他人にとっては些末なことであっても自分にとっては譲れない大切な何か。そうしたものが顧みられない切なさについて、誰しも一度は経験があることをまずは共有したい。その上で、少数者の意見が多数者の大きな声によって掻き消されていくような社会の構造へと話題を拡げたり、報道における印象操作などの問題に思い至ることもできるのではないか。個人の嗜好をめぐる不条理なユーモアやペーソスへと深めることもできるが、本作が提示する、社会全体の中での孤独のメカニズムが摑みとれるように促していきたい。

作中の総理大臣の音声は「歴史」と「経済」を等号で結ぶが、こうした経済至上主義的な価値観において、どのような少数の声が掻き消されていったのかは、二十一世紀の現代社会においても多くの事例があるはずである。平成二十一（二〇〇九）年、作者のエルサレム賞受賞式でのスピーチが話題になったが、「壁と卵」の比喩も「社会」や「個人」のあり方を考えるうえで示唆を与えるものであるといえよう。

（石川則夫・山岡正和）